

吊り床と「霜やけ」に悩む

koberyo1

夏の夜に仰ぎ見る月だった。それは黄色味をおび、大きく見えた。とはいえ、しかし季節が移り変わるのはめまぐるしい。

夏の月はいつしか秋の月へと変わり、そうして、ここ久里浜の海風はすでに冬と思えるほど、洗濯場での風はからだに針を刺す。

すでに月面に秋の風情はみじんもなく、仰ぎ見る月は久里浜に打ち寄せては引く波を、冷たく煌々と照らす冬の輝きだった。

このような季節、屋外は無慈悲な寒さではあったが、十一月の兵舎のなかでは人々の集うエネルギーがストーブを炊いたようなぬくもりとなって、かなり温かかく感覚されたものだった。

しかし、あろうことか、ふだんから清潔にしていたはずのわたしの左の指に、それは中指と薬指だったのだが、「凍傷」ができた。強い寒気は人体に作用し、「霜やけ」となったのだった。

患部は二箇所だったかと思うが、「ブヨブヨ」と崩れ、「ジユクジユク」とし腐れかけ、徐々に拡大してゆく。

こんな状況では、洗濯はもちろんのこと、痛みが激しすぎて課業の甲板掃除や、食卓番の作業などはできるわけがない。

しかたなく、わたしは軍としては非公認のシロモノではあったが、手ぬぐいを切り裂き、包帯がわりにして指に巻きつけた。

海軍には点検があり、手に白いものをつけたままでは点検にならず、取ることになるが、わたしは医務室からもらってきた軟膏を塗り、いわば包帯のようなもの、をしていたのである。

そんなことをしていたものだから、水を使った作業はスピードがないから上司から苦情がでた。歯を食いしばって頑張るしかない。

しかし、問題はもっと別なところにあり、事態は深刻さの度合いを増してきた。

というのも、海軍の寝床、すなわち寝るところはベッドではなく、ハンモックなのである。

朝と夕べにハンモックは仮設なので、そのつど吊ったり外したりの上げ下ろしの作業が必要になるが、傷口にハンモックのロープがふれないようタオルを巻いたが、作業スピードは遅くなるし、みんなについていけなくなる。

ギリギリなんとかやっていた。

それでもやはり、ふとした瞬間にタオルが外れ、傷口にロープがふれ、あまりの痛さに涙がほとぼしるのである。

だから、毎回の吊り床の上げ下ろしは、筆舌にしがたい苦痛である、憂鬱であった。朝夕と傷口が刺激され、これでは治癒するはずはない。

一日一回の点検には、傷口に海風が容赦なく吹きつけられ、「痛み」は増すばかりであった。

当時、少年期のわたしにとって我慢することはとても大切なことである、と今にして思う。すなわち、我慢によって「忍耐力」を自分が自分でもって育成することにある。

むかし子どもの頃に読んだ絵本にあったかと思うが、「山中鹿之助」が我に艱難辛苦を与えたまえ、といい、自己育成に真っ向から立ち向かっていったストーリーを思い出したりした。

組織に属している人間にはどうすることもできないことがある。この少年期に「忍耐心」を学んだ予科練での生活は、会社での組織人としての生きていかなければならなかったわたしにとり、「生涯の宝」となったのだった。